臨 床 報 告

胃 憩 室 の 一 例

A Case of Diverticulum of Stomach

日本醫科大學藥理學教室

醫學士 安 田 善 治

Yasuda Zenji

第一 緒 言

胃憩室は消化器憩室中最も稀に發見せられるもので、殊に生前之を放射線學的に診斷した例は極めて尠く、我國の現在迄の報告例は恐らく十指に満たないものと思はれる。

私は最近幽門近接潰瘍を伴ふ胃憩室と思はれる一例を経験したので以下簡単に報告する。

第二 症 例

患者 61 才 男

職業 無職（元鐵道職員）

家族履歴特別の事はない。

既往症 生來比較的健康で鐵道職員として約 40 年間勤務した。

現病の経過 昭和 22 年 3 月頃より特別の原因なく、食後右中腹部に疼痛を訴へ、約 1 ケ月間続いた。翌 23 年 5 月に同様の症状で某醫に蛔虫症として診療を受けた。

昭和 24 年 5 月初旬より再び右中腹部痛を來し、某醫に胃病と云はれ檢便の結果は蛔虫卵陰性であつた。其後輕快及惡化を繰返し、昭和 25 年初め頃からは臥床する事が多くなつた。又此頃から食思不振を訴へた。

外來時所見 右中腹部疼痛を主訴として昭和 25 年 9 月 6 日私の外來を訪れた。體格は稍大であるが栄養は可成減退し、輕度の貧血を認める。舌濕潤し白苔あり。體温 36.7 度、脉膊 84、血壓 116—80。胸部諸臓器に著變を認めない。

腹部は平坦、緊張正常で抵抗、腫瘤を觸れないが臍上部右寄りに可成の壓痛を訴へる。小野寺氏壓痛點は強陽性である。其他尿は黄色透明、比重 1030 中性、沈渣に異狀なく、蛋白（±）、糖（—）、「デイビス」反應（±）、便は黄色普通便、

稍不消化、潜出血（±）（ピラミドン法）、十二指腸虫卵を 2—3 視野に 1 個、蛔虫卵を數視野に 2—3 個認める。血液検査の結果は O 型、赤血球數 337 万、白血球數は 6700、血色素 74%「ザーリー」、白血球 100 分率は正常、ワ氏及び村田氏反應共に陰性であつた。尙胃液検査は手技上の失敗で残念乍ら不成功に了つた。當時患者は食慾不振、輕度の睡眠障碍あり、便通は秘結して居た。

其後内科的に對症療法を行つて経過を觀察して居たが、更に同月 30 日胃部 X 線検査を行つた。

（A）透視所見 胸部諸臓器に著明なる變化なし。胃は大量の空氣を以つて滿され、爲めに其の大略の輪廓を窺ふ事が出来る。型の如く造影劑を投與するに、胃は鉤狀、無緊張、且輕度の下垂を示す。幽門竇部の彎側のみに稍著明なる蠕動を認め、尙「バリウム」陰影の幽門通過は促進さる。輕度の胃擴張あり。又幽門部附近に壓痛を證する。殊に特異なる所見として、胃體上部後壁中央に孤立せる「バリウム」塊陰影を認め、尙該局所には壓痛なく、抵抗も觸れない。「バリウム」投與 1 時間半後には胃は已に空虚となるも上述の孤立小陰影は依然存在し、3 時間半後に至り初めて消失した。

（B）X 線寫眞所見 充盈直後立位脊腹像透視時所見の他に、幽門輪に近く胃小彎は強直を示す。但し明かなる「ニツシエ」は之を指摘する事は出来ない。尙憩室と認むべき囊狀陰影は、噴門を去る約 7 種の胃體部後壁中央に在り、大きさ示指頭大を示す。而も莖部を思はせる粘膜皺襞像を認める事が出来る。（挿圖参照）

診断 胃憩室及幽門近接潰瘍疑ひ（附十二指腸虫症）

第三 考 按

胃憩室は先天性にも、又後天性にも來り、而も生前の確診は只X線検査による他なく、之が詳細なるX線検査は 1923 年 Åkerlund の報告を以つてその嚆矢とする。而して先天性胃憩

室は噴門に近く、胃穹窿部に屢々多發し、且其後壁に發見されるものとされてゐる。大きさは通常櫻實大乃至鳩卵大のものが多いが、瀨木氏の例の如く巨大なるものの報告もある。又憩室壁の收縮程度に依り時に其形狀を變化する事があると云ふ。一方術前憩室を思はしむる所見を呈し、開腹時何等の異狀をも示さぬ所謂機能性

胃憩室の存在を主張する者もあるが、他方此等のものは十二指腸空腸彎曲部附近の憩室を誤認したものであらうと説く學者もある。然も我々は穿通性胃潰瘍、或は癌性潰瘍と胃憩室との鑑別には餘程の深い注意が必要であつて、加え其れが憩室炎を伴ふ際には愈々其の診断には慎重でなければならない。まして手術、或は剖見による摘出標本の組織學的検査を缺く場合は尙更である。尙X線検査上は充盈像の他に所謂胃粘膜皺襞像が時に診断の有力な根據を與へる場合がある事は勿論である。以上により私の報告例は手術による確認はないが、既往歴及びX線所見により、恐らく先天性胃憩室の1例と考へる。

第四 結 辭

私は生前診断される事極めて稀な胃憩室と思

はれる1例を報告し、主としてX線學的所見並びに考察を述べた。

終に臨み懇篤なる御指導を仰ぎ本稿の御校閲を賜りたる山梨醫學研究所放射線科部長武藤博士に謝意を表す。

参 考 文 献

- (1) 堤 : 中外醫事新報 第974號, 大正9年
- (2) 瀬木: 日本消化機誌 第25卷, 大正15年
- (3) 栗原: " 第30卷, 昭和6年
- (4) 中島: 日本消化機誌 第33卷, 昭和9年
- (5) 小山: 東北醫學雜誌 第17卷, 昭和9年
- (6) 宮本: 日本醫學放射線醫學誌 第4卷, 昭和11, 12年
- (7) 伊崎: 醫界展望 第232卷, 昭和14年
- (8) Schlesinger: Berl. kl. Wschr. Nr. 31 1917
- (9) Brückerer: Röntg Praxis 3J 1931
- (10) Åkerlund: Fortochr Röntgstr Bd 25 1924

最近六年間の附屬第二醫院に於ける盲眼の統計

Statistics of the Blind Eyes for the Last Six Years at
the Second Hospital of the Nippon Medical School

日本醫科大學眼科學教室 (主任 中村康教授)

市 川 達
Ichikawa Susumu

中村康教授は多年の研究の下に角膜濁濁に對する開眼に成功せられ幾萬の盲人に光明を與へる事が出来る様になつた。近年此の眞價が一般に認められ、教授の名聲を慕つて外來を訪れる患者は日増しに多きを數へ、特に盲人の來院多く本學附屬病院は開眼病院の觀を呈するに至つた。

私は昭和20年以來25年未迄の6箇年間に亘る第二醫院眼科外來患者中視力指數1米以下の患者に付き患者の數、年齢、住所、視力、眼症狀等につき統計的觀察を行つた。昭和20年第二醫院は戰災の爲灰燼に歸し以前の外來診療録を失つたので比較検討する事が出来ないが、最近の外來の状態の一端を知り得るし且多少とも盲人開眼に參考となると思ふので此處に發表する。

1) 人數

第1表の如く總人數466人盲人(兩眼とも視力指數1米以下の者)151人(32.4%)盲眼數617眼である。逐年的に急激に増加を示してゐる。男は249人女は217人である。